

日本外来小児科学会について

日本外来小児科学会は1991年に設立された学術団体で、(社)日本小児科学会の分科会の一つです。小児の総合医療と外来医療の研究、教育を推進し、小児の医療、保健、福祉に貢献することを目的としています。現在、小児科医を中心に、全国で約1,650人の会員が積極的に活動しています。

日本外来小児科学会では、子どもの病気、健康、安全、生活など、子どもを取り巻くすべてのことごとらについて取り組んでいます。その活動の一つとして、ご両親や子ども自身にぜひ知っていただきたいことを記載したリーフレットを作成しました。その内容については日本外来小児科学会が十分検討しました。多くの子ども達にとって役立つものであると自信をもってお勧めします。

©日本外来小児科学会

The Society of Ambulatory and General Pediatrics of Japan



定価 1部50円 (100部単位で頒布しています)

(会員割引などの割引制度があります)

リーフレットについてのお問い合わせ・購入申し込みは、
☎(03)3398-1904 Fax(03)3398-1905へどうぞ。

(このリーフレットの内容の複写・転載を禁じます。)



小児科・アレルギー科(喘息・アトピーなど)

あべこどもクリニック

〒223-0061
横浜市港北区日吉7-3-15
予約専用番号 045-566-2202
TEL 045-566-2112

抗生物質と耐性菌

とても大切な薬、それが抗生物質です
しかし・・・

抗生物質は耐性菌を生み出します



日本外来小児科学会



耐性菌とは？

抗生物質は細菌感染症の治療に欠かせない大切な薬です。この抗生物質が効きにくい細菌を「耐性菌（たいせいきん）」とよんでいます。

日本では毎年耐性菌が増え続け、より抗生物質の効きにくい耐性菌へと変化しています。その結果、子どもに多い中耳炎の治療が長引いたり、抗生物質でしか治せない重症の細菌感染症である髄膜炎（ずいまくえん）の治療が、たいへん難しくなったりしています。このように耐性菌の問題は、年々深刻になっています。

なぜ耐性菌が増えているの？

からだには多くの種類の細菌がすんでいます。病気の原因となる細菌だけでなく、たくさんの役に立つ細菌もすんでいるのです。そして、これらの細菌のほとんどは抗生物質に弱い細菌なのです。このため抗生物質を飲むと、からだにすんでいる多くの細菌の中で抗生物質が効く細菌は激減し、わずかだった抗生物質の効かない耐性菌は生き残ります。抗生物質を繰り返し使っていると、耐性菌だけがどんどん増えるだけでなく、役に立つ細菌も減ってしまいます。

耐性菌の増加は世界中で問題になっていますが、日本は耐性菌が最も多い国の一つになっています。それは、抗生物質の使用が他の国々より多いためと考えられています。

耐性菌が増えはじめた時期は？

日本では抗生物質の使用量が増えるにともない、1990年代から耐性菌が急増してきました。細菌も生き残りをかけ、その姿を変えているのです。

子どもで最も多い細菌による感染症は中耳炎です。1980年代前半の調査で、中耳炎の原因菌の代表、肺炎球菌（はいえんきゅうきん）の耐性菌はほとんどありませんでした。ところが、1990年代に入ると、この菌の60～70%が耐性菌となってしまう、その後も耐性菌は増え続けています。子どもがかかりやすいその他の細菌でも同じ傾向がみられます。

耐性菌を増やさないための対策が、どうしても必要になってきました。

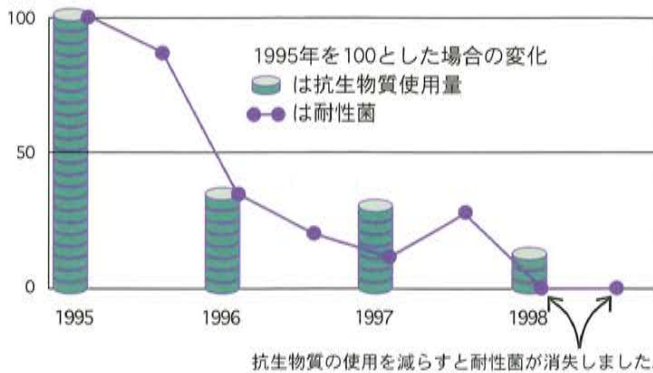
ウイルスと細菌はちがうの？

ウイルスは非常に小さな微生物なので、細菌のようにふつうの顕微鏡で見えることはできません。そして、細菌とちがって、私たちの細胞の中に組み込まれて増えていきます。

抗生物質は、細菌が分裂して増えるのをおさえたり、細菌の壁を壊し死滅させたりします。しかし、ウイルスにはまったく効果がありません。

※医学用語では「抗生物質」は「抗菌薬」と呼ばれていますが、このリーフレットでは広く用いられている「抗生物質」ということばを使っています。

告です。抗生物質の使用量を減らすと耐性肺炎球菌が激減し、最後には消失しているのがわかります。日本全体では耐性菌が増加の一途ですが、このように抗生物質の使用を減らせば、耐性菌を減らすことが出来るのです。



あなたのお子さんを耐性菌から守るには？

不必要に抗生物質を使わないという医療は、耐性菌の増加を防ぐために一番大切なことです。また、そのような医療は、重い病気を見逃さないためのいい診療につながります。

病気が重くなるのを心配して早めの抗生物質を求

アメリカの取り組み

耐性菌が増加しているアメリカでは小児科学会と政府が共同して、耐性菌から子どもを守るための家族に向けたパンフレット「不必要な抗生物質は有害です」を作成しています。不必要な抗生物質使用をなくすため、国民の教育に大変なエネルギーを注いでいます。

ヘモフィルス菌 (Hib) のワクチン

ヘモフィルス菌 (Hib) に対するワクチンが開発されていて、すでに多くの国で導入されています。特に子どもたちのほとんどが受けられるよう定期接種に組み入れている国々では、この菌による髄膜炎がまったくと言っていいほど見られなくなっています。

ところが、日本では毎年数百人の子どもたちが、耐性菌であることこの菌による化膿性髄膜炎にかかり、後遺症を残したり亡くなったりすることが続いているのです。はしか(麻疹)ワクチンなどと同じように、すべての子どもたちがこのワクチンを受けられる日が来ることを強く望んでいます。

めるのではなく、病気の状態を早めにかかりつけ医にご相談ください。私たち小児科医はどのように病気へ対応するのが最もよいかを判断し、お子さんを耐性菌から守りながら、ご家族と協力して適切な治療をおこないたいと願っています。

北欧の国々の取り組み

最も徹底した耐性菌対策を行っているのは、デンマークなどの北欧の国々です。たとえば、肺炎球菌は、日本では70%が耐性菌となっています。しかし、デンマークはいまだにこの菌の耐性菌は、5%未満に抑えられているのです。それを可能にしているのは、徹底した抗生物質使用についての国民への教育、そして耐性菌の増加をつかむための地域ごとの緻密で継続的な調査です。国をあげて、耐性菌撲滅に向けた大運動がおこなわれているのです。

抗生物質を飲んだら、 早くカゼがよくなるの？

鼻水、軽い咳、ノドの痛み、そして熱ではじまる「カゼ」の大部分は「ウイルス」が原因なのです。このためほとんどの「カゼ」には抗生物質は効果がありません。ウイルス感染でおこるカゼを早く治してはくれません。子どもたちは自分自身のちからで、多くのウイルス感染を克服し治っていくのです。

お子さんの病気の初期には、感染の原因が「ウイルス」か「細菌」かを明らかにするのが難しいこともあります。そのために私たち小児科医は、必要なときはウイルスか細菌かを区別するための検査をおこなったり、1回で判断しないで再度の受診をお願いしたりします。

耐性菌は身近な問題です

耐性菌は大病院の中で発生し「院内感染」で広がることもあります。むしろ外来診療で使用される抗生物質による耐性菌の増加が問題だということがわかってきました。たとえば、子どもに多い「とびひ」をおこすブドウ球菌の半数以上がすでに耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)であると報告されています。

耐性菌は大病院の中だけでなく、みなさんの家庭や保育所といった身近な場所に広がってきているのです。

さらに、農林水産業に関わる広い分野で使われる抗生物質が、ヒトの生活環境に影響していることも問題です。

カゼに抗生物質を使つては いけないの？

耐性菌が非常に少なかった時代には「カゼ」から肺炎などの細菌感染を予防するため抗生物質を投与する医療は、あまり問題をおこしませんでした。しかし、耐性菌が問題になってきた現在では、このような医療は抗生物質の使用を増やし、耐性菌増加の原因となっています。そして、必要なときに有効な抗生物質がないという恐ろしいことがおこってきています。大切な抗生物質は、本当に抗生物質による治療が必要なときにとっておきましょう。

耐性菌で重症細菌感染がおこったら？

耐性菌が肺炎や髄膜炎といった重い感染症の原因になると、飲み薬の抗生物質が十分効かないので、入院して強力な抗生物質を注射する治療が必要になります。しかし、いくつかの耐性菌はほとんどの薬が効かない構造となっていて、注射で使う抗生物質でも治療できないことがあるのです。

子どもで最も重症な細菌感染症は化膿性髄膜炎(かのうせいずいまくえん)です。その原因菌の代表はヘモフィルス菌です。特に髄膜炎ではこの菌の7割が耐性菌に変化しています。これは、命に関わるたいへん重大な問題です。

耐性菌を減らす方法は…？

お示したグラフは、「二十四の瞳」のふるさと小豆島における「抗生物質と耐性菌」についての貴重な報